

障がい支援技術を用いた特別支援教育に関する専門的知識・技能の習得を目指した授業の試み

特別支援教育講座・荻田知則

1. 授業の概要・目標

肢体不自由児者をはじめ、多くの障がい児者は、学習・移動等の困難だけでなく、コミュニケーション上の問題を持っている。コミュニケーションがうまくとれないということは、当事者のQOLが低下したり、自己効力感が低下したりする可能性がある。ゆえに、特別支援教育の現場においては、障がい当事者の「話したい」というコミュニケーション欲を充足させることが重要である。本授業では、代替コミュニケーション(AAC)や支援機器(AT)を用いることで、肢体不自由児が他者とコミュニケーションをとることができる支援法を学ぶ。

本授業の目的は、(1)障がい疑似体験を通して、肢体不自由をはじめとした障がい児者の困難を共感的に理解する態度を身につける、(2)障がい児者のコミュニケーションを支援するAACやATの基本的知識について説明できる、(3)障がい特性・ニーズに合わせたAAC、ATの使用方法を説明できる、(4)当事者の生活にあわせたインタフェースを考案することができる、であった。

2. 講義の進め方と内容

本授業は、以下の通り行った。なお、各回の復習として、翌回に小テスト(5問)を行い、学生の授業外学習を促した。

- 1回：ガイダンス、AAC・ATとは？
- 2回：AAC・ATの種類
- 3回：発声発語器官の解剖・生理
- 4回：発声発語器官の発達(定型発達児と肢体不自由児)
- 5回：0～2歳の言語理解の発達(定型発達児と肢体不自由児)
- 6回：3～5歳の言語理解の発達(定型発達児と肢体不自由児)
- 7回：肢体不自由児者の疑似体験(コミュニケーション)
- 8回：肢体不自由児者の疑似体験(移動・食事・身だしなみ)
- 9回：肢体不自由児者対応のAAC、AT
- 10回：合併しうる障がい(知的障がい)と実践例
- 11回：合併しうる障がい(発達障がい)と実践例
- 12回：合併しうる障がい(視覚・聴覚障がい)と実践例
- 13回：グループワーク(マウスの改造)
- 14回：AAC・ATのフィッティング過程
- 15回：総括

以下に、本授業で取り扱った内容を概説する。

(1) AACに関する基礎知識

AACの定義やATの種類について概説するとともに、AACアプローチを適用する上で、理解しておくべき発声発語器官の解剖・生理や、言語発達について概説した。

(2) 障がい疑似体験

肢体不自由児者が抱える困難を共感的に理解するために、疑似体験を行った。本授業で取り入れた疑似体験は、1)身体の一カ所しか随意的に動かすことができない肢体不自由児者が、五十音表や透明文字盤を用いて会話する、2)四肢を随意的に動かすことができない肢体不自由児が歯磨きなどの身だしなみを整える、3)視覚・聴覚障がいを併せ持つ障がい児者が移動・会話する、4)知的障がいを併せ持つ障がい児者が会話する、という4つであった。

(3) グループワーク

肢体不自由児にAT利用を導入する際は、スイッチ遊びから始め、自らの動作(スイッチを押す)と結果(おもちゃが動く)の因果関係について理解を促すが、市販のおもちゃは肢体不自由児が操作することができないものが多い。加えて、肢体不自由児がパソコンを使う際にも、市販のマウスは使用できないことが多い。したがって、電子工作の要領で改造する必要がある。本授業では、簡単なATインタフェースの改造として、肢体不自由児者用に開発されたスイッチと接続できるように、市販のマウスを改造する実習を行った。

また、意識は清明であるが重度の運動障害により意思の伝達が困難な障がい児者(閉じ込め症候群等)への支援として、現場では透明文字盤が用いられている。本授業では、透明文字盤をグループで作成し、疑似体験の中で試用する実習を行った。

(4) 事例も含めた実践例の紹介

疑似体験だけでは、障がい当事者が感じる困難を過大に評価してしまう可能性もある。したがって、実際のコミュニケーション支援や機器の調整(フィッティング)過程の事例を紹介し、受講生の理解を深めるよう努めた。

3. 授業評価の方法と結果

授業の最終回に、受講生に授業評価アンケート(無記名式)を配り、以下の項目について質問した。出席・小テスト用紙とは別に回収し、登録者38名中35名から回答を得た。なお、a)については自由回答、b～i)については4段階尺度(1=ほとんどそう思わない、2=あまりそう思わない、3=かなりそう思う、4=非常にそう思う)、j)については6段階尺度(1=全然達していない、2=あまり達していない、3=どちらかという達していない、4=どちらかという達している、5=かなり達している、

6=十分に達している)で回答するよう求めた。以下、授業評価で行った項目と得られた結果を示す(項目 b~j)への回答の詳細は下図参照)。

a) 一番記憶に残っている講義内容は何ですか？

グループワーク：22名，パソコンのアクセシビリティ補助：5名，疑似体験：3名，その他：3名(VTR，言語発達過程等)

k) あなたの講義内容に関する理解度は、100点満点でいうと、どのくらいですか？

平均点 80.6点 (標準偏差 8.3)

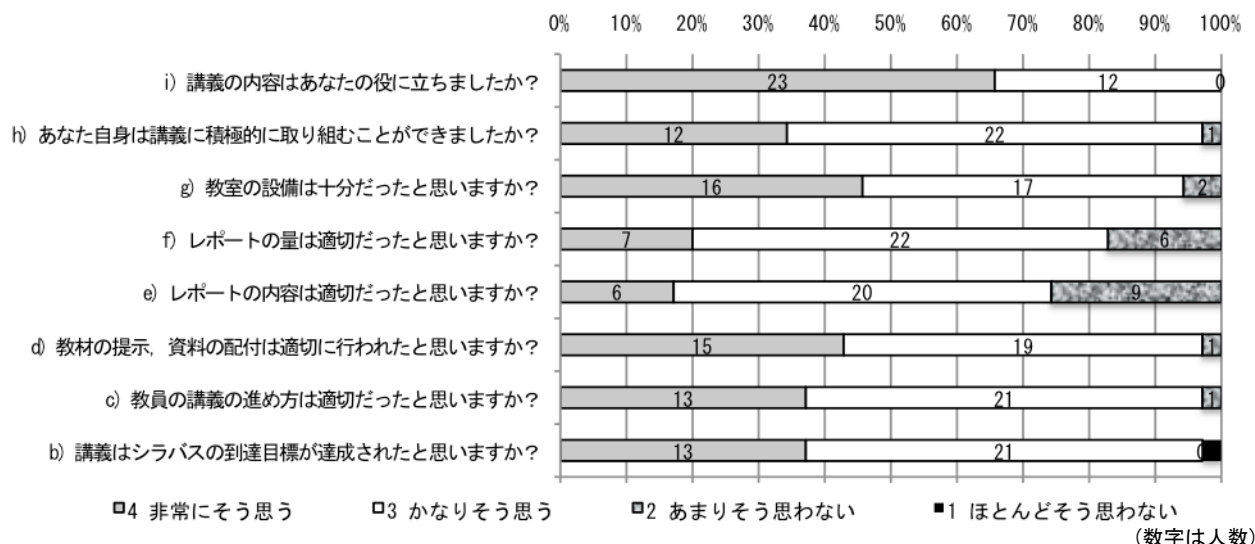
4. 考察・まとめ

a) の回答を見ると、多くの受講生が、グループワーク(マウスの改造，透明文字盤の作成)やパソコンのアクセシビリティ補助に関する実習，疑似体験等の実技型学習が記憶に残ったと回答している。また、b~i)への回答をみると、ほとんどの項目で「3 かなりそう思う」以上の高い評価を得た。ただし、e)の「レポートの内容」とf)の「レポートの量」に関して、三分の一前後が「あまりそう思わない」と回答している。本授業では、教科書を主体的に理解するための取り組みとして、一部の章を要約するレポート課題を出した。特別支援教育に関するテーマであるが、授業中に取り上げる時間が少なかったこともあり、前述の評価

につながったのかもしれない。今後、教科書の利用方法やレポート課題の意義等について、より丁寧な説明を加える必要があると考えた。

k)への回答では、受講生は平均80点以上の理解度と自己評価しており、理解度に関する自己評価は高いといえる。また、j-1~j-4)の項目への回答を見ると、j-1~j-3)については9割以上が「4 どちらかという達している」と評価しており、受講者自身、授業の目標を達成したことを実感していると言って良いだろう。ただし、j-4)の項目に関しては、「3 どちらかという達していない」以下の評価が6名認められた。グループワークや疑似体験等で実技型学習を多く取り入れた本授業であったが、実際の教育現場で支援を行うためには、受講生自身が学習や体験を繰り返し、自信を高める必要があるのかもしれない。

最後に、本授業では、実技型学習に加え、多くの視聴覚教材(VTR等)を用いた。これらの視聴覚教材は、障がい児者の実態を理解する上で効果的だったと考える。また、使用した教科書類は、医学・心理学・福祉工学的基礎知識がわかりやすく解説されているが、今後更に受講生が主体的・能動的に教科書類を使って理解を深めることができるような授業づくりにつなげたい。



	6十分に達している	5かなり達している	4どちらかという達している	3どちらかという達していない	2あまり達していない	1全然達していない
j-1) 障がい疑似体験を通して、肢体不自由をはじめとした障がい児者の困難を共感的に理解する態度を身につける。	3	23	9	0	0	0
j-2) 障がい児者のコミュニケーションを支援するAACやATの基本的知識について説明できる。	1	16	17	1	0	0
j-3) 障がい特性・ニーズに合わせたAAC，ATの使用方法を説明できる。	2	7	23	3	0	0
j-4) 当事者の生活にあわせたインタフェースを考案することができる。	1	13	15	5	1	0

(数字は人数)